
ペンギンズ・メモリー

今西 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペンギンズ・メモリー

【Zコード】

Z6344D

【作者名】

今西薫

【あらすじ】

山岸と前島は友達以上恋人未満な関係。ほんの少しの勇気さえあれば、大きく前進できるのに、その一步が踏み出せない。ほのぼのラブストーリー

カバンの中にはわたせなかつたチヨコレートがある。

一月十四日つて日に意味があるんだから、もう捨ててもかまわないようなものなんだけど、今さらどうすることもできないこのつみを、カバンの中に入れてもうすぐひと円になる。

だつてしようがない。テキは手強すぎるんだから。

だからあたしは、今日もカバンの右の隅に残したまま、教科書やノートを取り出す。ふたを閉める時に手が止まつてしまつのは、やっぱりミレンなんだと思つ。

「なんかおまえさあ」

『テキ』が、うなるよつて言つた。

隣の席つていつのが、やつぱりまづかつたんだと、あたしはしみじみと思つ。

決心して、ちょっと早く来て、心の準備して、わたすんだと思つて、教室に入つたら、いつもならいない善の人間がいたんだもん。驚いて、用意していたはずの言葉も、心の準備も、笑顔も、みーんなどつかへ行つてしまつたわ。

そんなあたしの気持ちを知らない『テキ』はじーっとあたしの顔を見て、眉間にシワを寄せた。

「最近、元気なかつたりしない?」

「…………あんたつて…………」

あたしはうーんと、唸つて慌てて返事を考えた。

「こきなり、何を言つたかと思えば」

「ほり、やつぱりとあ、隣の席のヤツが元気なかつたりすると、右足は鉄のゲタ履いて左足は普通のゲタ履いて歩いてるような感じにならない?」

相変わらずヘンな奴だなあ。

「一つ訊いてもいい?」

「うん?」

「あんた、鉄の下駄履いて歩けるの?」
じーっと黙つてあたしの顔を見る『テキ』の顔が、『心配してソ

ンをした』つてふうになるのを見届けて、あたしは少し安心した。
「元気そうでなによりだ」

ただ一言そういうと、『テキ』前島は席を立つた。
だつて、ねえ。

いくらトモダチつていったって、言えないことくらいはあるよね。
それはもう、ホントに塵が積もつてこーだいな土地になってしま
つた夢の島みたいに。

弱小バスケット部は、部員の数はちゃんといるのに、試合に出で
二回戦より先に進んだことがない。それは、男子も女子も同じで、
だからか、男子部と女子部はとっても仲がいい。試合の時間が重な
らない時はお互いの応援団になるくらいに。

そんなバスケ部であたしと前島はそれぞれ補欠をしていて、つまり、その程度の実力しかないんだけど、『情熱は誰にも負けないよ
ね』と言い合つた仲だった。

あたしは前島のことをトモダチとしか見ていなかつたし、それは
前島も同じだったと思う。 - - 去年の春までは。

そう。去年の春までは、前島は気のいい男友達で、補欠にしかな
れない同じバスケットバカで、クラスメイトだった。

学年末試験の関係で午前中で学校が終わつて、部活もないからブ
ラブラと駅に向かつてゐる時、前島が自転車で通りかかつたのだった。
あたたかい日で、足下を見れば、ぽつぽつと春の花が咲き始めてい
て、空は青くて、あたしはペンギンの事をつい、しゃべつてしまつ
たのだ。

「なんだかペンギンが空を飛びそうな匂だよね」

言つてしまつた瞬間、前島にバカにされる光景をリアルに思い浮かべてしまつたあたしは硬直してしまつた。身構えて、おそれおそれ前島の方を見ると、あたしの想像していた表情と違つていた。

「あ…………あははははっ」

笑つてじまかそうとしたら、前島は自転車から手を離して、あたしの両肩に手を置いた。がつたんと自転車が倒れるのもかまわずに、なんだか妙に嬉しそうに前島は「そうだよなー」と言いだした。

「おまえもやつぱりそう思つ? ペンギンは空を飛ぶよなつ」

あたしはうなずいていいのか悪いのか、やつぱり悩んでしまつた。冗談ではなく、嘘でもなく、あたしはペンギンが空を飛ぶのを見たことがあつた。十年以上も前、今より空がほんの少し遠かつた頃、一度だけ。

あたしが黙つていのをいいこと、前島は興奮して両の掌を握つて横を向いて空を見上げた。

「ペングインは進化して、空を飛ぶんだ」

まつすぐ前を見て、真剣な顔をして、一生懸命に飛ぶその姿が瞼に焼きついていた。誰も信じてくれなかつたけど、あれは絶対にペングインだつた。

「うん。 そうだよね」

誰も信じてくれなかつた話を、あたしはもう一度してみた。前島は信じてくれた。それだけで充分だつた。

トモダチという関係に終止符を打つと思つたのはあの光景を見たからだと思う。

秋の夕暮れ時、体育館横のイチョウの木の下で、隣のクラスの女の子が前島を見上げていた。きんいろの空氣の中で、二人は一枚の絵のようで、その時初めてあたしは、やつじやない可能性に気がついた。前島がその女の子をふつたという話を耳にした時、あたしは

ほつとしたのを覚えている。

なんとなくうやむやな関係のまま半年が過ぎて、あたしはあたりまえのように近くにいた。それは、トモダチ以上でコイビト未満であやふやで、居心地が良くて、ぬるま湯の中にいるような気分だった。けれど、それは錯覚だということに気がついた。

前島は、悪く言えば八方美人だ。良く言えば、社交的だ。社交的で、友達は男女を問わず沢山いて、あたしはその中の一人に過ぎない。

同じ部活で、同じクラスで、補欠『同志』で、一緒にいる時間が、他の女の子と比べて少し長いだけで、ただ、それだけで。あたしは決心した。実行に移すまでに四か月もかかつたけど、きっかけという点で見れば、バレンタイン、ティーは最高だと思ったから、一月十四日に告白すると、決めた。

…結局、できなかつたけど。

セヒ、どうしようか。

チョコレートは、腐らないけど。そう思つけど。溶けてビリビリになつて、ペンギンには見えないかもしねない。

「やーまーきーしー」

名前を呼ばれて、あたしは少しドキドキした。

タイムリーというか、偶然つてコワイわねーつていうか、まあ要するに前島のコトを考えていたんで、ちょっとびっくりしちゃつた。よく考えると全然偶然じゃないんだけど。

「なに、驚いてるの？なんかヤラシイことでも考えていたとか」頭の上から声が降つてくるんで、あたしは座つたまま、見上げてみた。前島が片手にパンを持って、あたしの後ろに立つて見下ろしていた。意地の悪そうな笑みを浮かべている。

「あ、チョコチップパン。少しつけて」

「その鼻の頭のバンソーポーの理由を言つたら、わけてやつてもいい

「かな」

「いつじわるだなー」

見てたくせに。

体育の時間、男子は隣のコートでバレー ボールをしていた。女子もバレー ボールをしていて、あたしはアタックをしようとしてトスを顔面にぶつけてしまったのだ。顔を押さえながらちらつと男子コートを見る前島と目が合つたから、見てたに違ひない。

どさつとあたしの隣に腰を降ろした前島は、理由を聞く前にパンを半分くれた。

「ありがと。いじわるって言ったの撤回するね」

部活が終わって、疲れて、サッカー部を見るともなしに眺めていたらやつて来た前島は、一体なんの為に来たのだろうかとか、男子はもう終わったのかなとか、やっぱり土曜日は早く終わるな空が青いなとか、いろいろ考えて、結局あたしは黙つていた。

「別にしなくてもいいけど、調子悪いんじゃないの？ 理由あるなら言わない？」

「理由ねえ……」

あたしはチョコチップパンにかぶりついて空を見た。

「俺としてはさあ、『同志』のおまえが元氣ないのは張り合いかなかつたりするんだよね」

「…………うん」

「まさかさあ、三年になつたら、やめるとか言つたりするわけ？」

あたしは改めて驚いてまじまじと前島を見た。

「やめるつて、受験勉強の関係で？」

前島は大きく頷いて、安堵の溜息を漏らした。

「訊き返すつてことは、考えてないつてことだよな」

「ああそうか。前島は、下手だけどバスケット好きな『同志』がいなくなるのを恐れたわけね」

頷いてから、前島はふといぶかしむようにあたしを見た。

「…………じゃ、なんなわけ？ 僕、ここそこずっと考えててさ、お

まえ辞めたら一人下手なのが田立つてしまつとかせ、やつぱり受験考
えなきやいけないのかなーとか。……違うってことは、も、いつか
「バスケ部はやめないよ、県総体が終わるまでは。やつぱり、下手
でも好きだから」「

それだけのこと。だよね。やつぱり。

残念なような、ほつとしたような。

あたしはチョコチップパンをほおばつて空を見上げた。
そういうえばこんな時季だった。

覚えてるかな。前島は。

「帰るっか。心配をかけたお詫びに、缶ジュース一本ぐらいはおいるよ」

にっこり笑つて言うと、前島は至極真面目な表情になつた。

「……エビで鯛を釣つてしまつた気分だ」

相変わらずヘンな奴だ。

7

エビで鯛を釣つた前島は無言で自転車を引いている。
あたしはやつぱり緊張して、けれど何氣ない調子で空を見ながら
前島の隣を歩いていた。

少しほこりっぽい空気が春だなあと思つ。

足下にはタンポポや、青いじゅうたんみたいなオオイヌノフグリ
やつくしがあつて、きっとそのうち桜が咲き始める。

「あ」

空を見ていたあたしは始め、信じていなかつたのだ。

- - けれど。

「なに？ 山岸」

あたしは口を開けたまま、前方を指さした。

黒い点。始め、あたしはカラスかと思っていた。

「ん？」

あたしの指した方向を前島は見て、もう一度あたしの方を見た。

あたしはバカみたいに少し大きくなつた黒い点を指したまま、前

島の顔を見る。

「だから」

ほら、あれ。

もどかしくてしょうがない。

一度忘れてしまつた言葉を、あたしが一生懸命探していると、前島は再度空を見た。そして、動きを止めた。

「あれって……」

十数年前の映像とオーバーラップした。

飛んでいたのは、カラスでも、コウモリでもなく、ペンギンだつた。あの時と変わらず、まつすぐ前をみつめて真剣な顔をしていた。

「すげーや……」

前島が呟いた直後に、ペンギンはなんの前触れもなく、いきなり、墜落した。

もう一本向こうの道の方だつた。

どうして？　だと、なぜ？　だとそんな言葉だけが頭に浮かんで、あたしはこれは夢なんだ信じたかつた。

「山岸」

名前を呼ばれて我に返ると、前島が左手を差しだした状態でいつの間にか自転車にまたがつていた。

あたしは手に持つていたカバンをわたすと荷台に飛び乗つた。

「ちゃんとかまつてろよ」

うなずいて、前島の腰に手をまわして、あたしは目をつむつた。

夢なんかじやない。

はつきりと、頭の隅で妙にはつきりとリアリティーをもつて判つていた。

あれは絶対に夢なんかじやなかつた。

どうしてこんなことがこんなに気になるのか、自分でも判らなかつた。

驚くべきことは、ペンギンが落ちたことではなく、ペンギンが空

を飛んでいることだといふことも、頭の中では判っていた。

- - けれど、体がそういうふうには動かなかつた。

落ちていったペンギンを追つて何になるんだろう。もう死んでしまっているかもしれない。大怪我を負つて、助からないかもしれない。- - あるいは、大した怪我でなくとも、あたしを見て逃げだすかもしれない。そんなことを考えても、やっぱりあたしはペンギンがどうなつたか、ちゃんと生きているか確かめたかつた。

ブレー キが軋んだ音をたて、自転車は横滑りしかけて止まつた。あたしは停止するかしないかのうちに駆けだして、転びかけながら家と家の間の小さな空き地に入つていつた。

「や、山岸つ」

前島の慌てた声が聞こえる。

あたしは横たわつた黒い物体を見つけてしゃがみこんだ。赤いクチバシの小さなペンギンだつた。

うつ伏せになつてゐるペンギンを仰向けにし、心臓とおぼしきところに耳をあてる。

トク、トク、トク、トク……

あたしは大きく息を吸つて、ゆづくりと吐いた。

「おまえ、無茶苦茶。…………生きてた？」

歩いてきた前島が訊いてきたので、あたしは頷いた。

「打ちどころが悪かつたのかな」

覗き込む前島はずいぶんとひどことを言つ。

「氣絶してるだけみたい」

「ケガはしていないみたい？」

「うん」

翼の具合も、体を触つた感じも、羽が乱れていない様子からも、よほど落ち方が良かつたつて感じがする。

「良かつたな」

ちょっとフクザツな顔をして、前島が言った。

あたしは頷こうとしておかしいということに気付いた。

「……ねえ、前島。それはあたしのセリフだよ」

今はどうかは知らない。でも一年前は『ペンギンは進化して空を飛ぶんだ』と言っていた前島だ。あの時の真剣な表情はどこへ行つたんだろう。

「俺もそう思うんだけどね」

苦笑して、前島はペンギンを見下ろした。つられてあたしもペンギンを見て。

「やけに、真剣な顔してたからさ」

「……うん

」つん。

「ほり、いつだつたかさ、言つてたじやない。空飛ぶペンギンを見たことがあるつて。もしかして、お知り合いだとかさ」

「……」

「一ゆー奴だよね、こつま。

「あれ？ 違うの？」

きょとんとして、前島はあたしを見つめた。

「どりして、そんなふうに考えるんだか、あたしの方が知りたい」

「じゃ、なんで？」

「じゃ、なんであつて。なんであつて……」

「ひつみつだよー」

「言えるわけがない。

」言つわけがない。

「ケチだなあ

前島はつまらなそうな顔をして呟いた。

でも、ちょっと考えれば判るかもしね。

あたしは、判つてほしいのかもしれない。

とってもカンタンな話。ペンギンが何を示すのか。

前島にとっては大した話ではなかつたのかもしれないけれど、あ

たしにとつては大した話だつたつてことを。

「あははは」

笑つて、『まかして。あたしはペンギンをじつと見る。

「こいつ、すゞこよねー。本当に飛んじゃつてるもん

「おうつ。俺、今、すつじく感動してんだぜっ」

「生きてて、良かつたね」

「うん。 - - あ」

ペンギンがぱっちり田を開けた。

つぶらな、真つ黒な瞳を見開いた。

そして、まばたき一つ。

一瞬の間の後、飛びすさり、あたしたちから二メートルくらい離れてから、走りだした。

それは助走だった。すゞい勢いで走つて、羽をばたつかせて、地面を蹴つた。ふわりと宙に浮いた時は、まるで田の錯覚のよつな感じがした。

あつけなく、あつといつ間にペンギンは飛んでいつてしまつた。青い空に黒い点が一つ。その点が消えた時、あたしたちはびしきらからともなく笑いだした。

「あつけなかつたねー」

「鶴の恩返しつて嘘だよなー」

「だつて、知らないんだよ、さつきのペンギンは。助けてもらつたつてこと」

前島はちょっと考えて。

「俺たちつて、あいつを助けたつけ」

「……」

顔を見合わせて。

「そーだよねー」

運の良かつたペンギンは落ち方も良くて、ケガ一つなくて、見かけた人間も捕まえようなんて考えないようなあたしたちだったからこそ助かつたんで……。きっと、ただ恐い目にあつたと思ってるん

だろう。助けたと思つてゐるのはあたしたちの勝手で、悪気がなく
ても、誠意が必ずしも伝わるとは限らない。
それは正しい考え方で、だから少し哀しい。

「しまつたなー」

前島は腕を組んでうなつた。

「無理やりにでもサインもらえば良かつた」

前島は、期待してなかつたんだらうか。

ほんの少しども。

「サインついてどうやつて?..」

「足形をとる。空飛ぶペンギンの足形。一生モノの宝物だよなー」

「ペンギンさん、逃げられて良かつたね……」

あたしは溜息をついた。

「おまえね、今頃あのペンギンは俺にサインしなかつたことを後悔
してゐかもしけないんだぜ?」

「その自信はどこから来るのよ」

「んなもん、やってみなくちゃ判らないじゃないか」

前島は、期待してなかつたんだらうか。

「頼めばサインしてくれたと思う?..」

あたしは思いつきり顔をしかめて聞いてみる。

どうでもいいけど、あたしたちは空き地に座り込んだままだ。

「バカか、おまえ。相手はペンギンだぞ、ペンギン。いくら飛べる
ようになつたからといつたつて、ペンギンが人の言葉を理解できる
と思つのか?..」

「じゃ、どうやって後悔するのよ」

「バカか? サインつていうのは気持ちの問題で、なんだか判らな
くて恐くて逃げてしまつたけど、もしかしたらさつきの人達は悪い
人ではなかつたかもしれない。慌てて逃げて悪いことをしたなあつ
ていう後悔なんだよ」

「あ、あんたねえ……」

あーつ、なにを考へてるんだか。こいつはっ。

あたしは今、にわかにとんでもなく前島の答を期待したのに、損をしたじやないかつ。

「おまえ、あきれるけどね、所詮ペンギンはペンギンだぜ？ 複雑な感情を持つていたとしても、人間と同じ価値観とは限らないじやないか」

「……」

目から鱗が落ちた。

「そーれは考へなかつたわ」

あたしは、お礼が欲しかつたわけじやない。それでも期待していた。

おんなじだね。

あたしにとつてペンギンは特別なものだつたけれども、ペンギンはペンギンで、やっぱりペンギン以外のものではなくて。

きつと、チョコレートをわたせてたとしても、ペンギンの意味に気付くこともなくて。あたしの独りよがりで、これじや、なんの為に言葉があるのかわからない。

「そーだろ？ やつぱ俺つて頭いいから

」「一ゆ一奴だから。

きつと言わなきや判らない。

「あのね」

2

ペンギンズ・メモリー 2 . . 空がとんでもなく青い日 . .

同志だね！

山岸にそう言われた時、ああそりなんだと、やけにすんなりと納得した。

下手でも好きであればいいと思えた。

それ以来、あいつは、一步前を歩いている。バスケ部に入部して以来 - -。

ピッヒフフの音がある。隣のコートでは女子がバレー ボールをしている。三年生にもなると、楽しく運動ができればいいということなのか、やつていることがお気楽だ。三、四組の合同授業で、何チームか作って、リーグ戦をするらしい。壁にはつた勝敗表がその意気込みを伝えている。

サーブは山岸だった。同志だ。うちの学校のお気楽なバスケット部の補欠にもなれない部員同士だ。

山岸は、中学校時代はバレー ボールをしていたと言つていただけのことはあるサーブをしていた。そしてそれが、相手コートのネット際に落ちる。

「なによそ見してんの、前島」

「……女子の脚がまぶしいなっと……」

「 - - ふむ。山岸じゃないか、あれ」

隣に座つて、一緒に男子の試合を見ていた小出は、腕組みをして、感嘆の溜息を漏らした。

「うまいなあ……」

「バレー やつてたつて言つてたからなあ……」

山岸に、ちょっとオーバーなくらいに、嬉しそうに声をかけている女子がいる。確か久野とかいう娘だ。

「そーなんだ。……おおつ、かつこいいぞ、バレー ボールの選手のようだ」

山岸のサーブを見て、小出はまたまた感嘆していた。だが、今度のサーブはちゃんと拾われた。せつかくネット前に上げたのに、トスもせずにボールを返してくれる。

「早菜子ちゃんっ」

声が響いてネット際に久野が走つてコートの中央あたりにトスを

上げた。

「え？」

山岸が驚いたように声をもらした。

山岸は高くジャンプしていた。

そして、振り上げた手の位置にボールはあり、次の瞬間には相手側のコートに落ちていた。

「すげー」

小出は咳いた。女子の方ではどよめきが起こっていた。

山岸は少し困ったように笑っていた。

「早菜子ちゃんっ！ やっぱり一緒にバレー ボールしましょっ！」

久野が騒いでいるのを、哀しそうな瞳で見ていた。

「バツクアタックだよな、あれ」

小出が腕をつづいた。

「そりなんじやない？ さつき、山岸サーブしていたから」

「 - なあ、なんで山岸はバレー部に入んなかったの？」

小出のバカな質問に、正しい答えを言つてやる必要はない。

「 - なんで、それを俺が知るわけ？」

あきれてものも言えないふうを装つて、言つてやつた。

「仲いいじゃない、おまえら」

当然だろ？ といつぱり、小出は言つた。

「……小出、考えが甘いな」

ちつちつちつ、と指を振つて俺は言つ。

「たとえ仲が良くても、俺にはお前の考えていいことはまったく判らない」

「それは残念だ」

大まじめな表情で言つ小出から視線をはずして、俺は着実に点を入れている山岸を見ていた。久野と山岸のコンビは、素人の俺にもその凄さが判つた。

二年間もブランクがあつたとは思えない - - 。

そんな感じがした。

土曜日は早くに部活動は終わる。けれど、今日はなんだか練習がしたくて、俺は体育館に残った。天気がいいので、土曜の第一部のバドミントン部は外で元気に跳ね回っている。貸し切り状態だ。ボールを床に三回ほどつく。コールを狙う。ジャンプショート！だが、ボールはリングに当たって跳ね返った。

オーバーラップする映像。

帰ってきたボールをつかまえて、俺は小さく息を吐いた。

山岸に好きだと言われたのは、約ひと月前のことだった。その時俺は、何を考えてんだか、バカなことを言ってしまった。

- - 一ヶ月待つて……

今考えても情けない返事だ。なのに山岸は、うん判つたと答えてくれた。そして、何ひとつ変わらず、今まで通りに付き合ってくれている。……つまり、友達だ。

そんな山岸に対する負い目があるのかもしれない。

俺の目には山岸がアタックするその瞬間の映像が焼きついてはなれなかつた。

……なんでバレーボールに入らなかつたんだろう。山岸は。

なんで「同志」なんだろう。

高いジャンプ。高い、高いジャンプ。

それが、何度も繰り返される。

「はあーっ」

思いつきり溜息をつく。これで楽になるのなら、もうじっくりでもつて感じだ。胸のもやもやが晴れなくて、なんだか気持ち悪くてしかたがない。

「まるで、ゾウの溜息……」

振り返ると、山岸がいた。

少し怒ったようにこちらを見ている。

「練習なら、誘ってくれたら良かつたのに……」

「バレー部、入らないの？」

言つてからしまつたと思つた。顔が赤くなるのが判つた。

「じめん。今、俺、どうかしてるんだ。悪いっ」

山岸の表情はあまり変わっていない。

「……なんで、前島までそんなコト言つかな……」

それでも、そんなことを呴いて、俺に負けず劣らずの溜息をついた。

「昔とつたキネヅ力だよ。……ねえ、一緒に帰りうよ。もつ終わるんでしょ？ 出口ヒーをおいぬかりわ」

氣分を引き立てるよつて明るく言つと、山岸はしつかりと笑つた。

「んじや、お詫びだ。出口ヒーおいぬみ」

「……出口ア……」

なにやうひつかかつた様子で呴いた彼女は顔をしかめた。

「ま、そう言わないとも言えないし……」

「缶ジユース、出口ヒー、出口ヒー、缶茶」

「……かんぢや……」

吹き出して、ひとしきり笑つて、山岸は、じゃあ行ーーかと出口に向かつた。

「バレーボールはねえ、小学生の時からやつしたんだよね
お互いにおいづつあって、歩きだすと、山岸はそんなふうに話しだした。

「んで、中学の時には、自分で呴つのもなんだけど、結構上手かつたんだ。三年の先輩を押し退けてレギュラーに選ばれるくらい
なんとなく、判つた気がした。

「人間関係つて難しいから……」

笑つてはいるけれど、山岸は。山岸がやめてしまつへりこのいと

がきつとあつたんだね。』

「白状するとね、バスケットは手を抜いているのかもしない精神的なものは、影響する。上手くしてはいけないと思い込んでしまつたら……。」

「そのつもりはないんだろ?』

「……やっぱり前島つて、ヘンな奴』

そこで笑わなくとも別にいいんだけど、山岸は何故か大笑いした。俺は特にコメントすることもせず、晴れた青い空を見上げた。

空には雲ひとつない。アスファルトはかすかに湿っている。少し雨が降つたらしい。通り雨だつたらしく、もづびこにも雨を降らしそうな雲がない。そのせいか、太陽が直にあたつてじりじりと暑い。まだ四月だというのに、まるで夏だ。

「……伴の子竜をよこします」

ふいに思い出した。

「え? ロタツ?』

山岸が聞き返してきた。

苦笑してしまう。判らないのが普通だ。

「小咄だと思うんだけど、この間聞いたんだ」

「コバナシって落語のだけ? そんなん好きなんだ……」

「ちょっと、人の影響で、やたら耳に入つてくるんで」

「ふうん?』

山岸は少し興味をもつたようだ。

「暑い夏の日の咄でね、男が夕立のあつい雨だつたと空を見ていると竜が現れるんだ。雨を降らせていたら雲から落ちてしまつたので、雲が迎えにくるまで、ここにいさせて欲しいなんて言って。しようがないんで、男は竜と世間話をはじめたりしてね、いい雨だつたとか、なんとか。それを聞いて竜は『私が降らせたんです』って言う。『夏は雨を降らせて涼しくします』って。とね、男は聞くん

だ。じゃあ、冬は？ って。竜はすかさず、答える。『俺の「タツ」を寄越します』

「息子の「タツ」……」

山岸は眩くとぽかんと口を開けたままじぱりと俺の顔を見ていたけれど、唐突に笑いだした。

「ばつかだねえ

ほつとする。

「バカだろ？」

「うん。いいね。ぐだらなくて。あたし、そういうの大好き

社交辞令でもなんでもなくて、それは山岸の本心だから、それが

判るから俺も嬉しい。

「ね、他にはないの？」

「いや、あるけど……。せっかく面白に嘘でも、俺がするといつまらなくなるからなあ……。今度テープを貸そつか？」

「え？ 持ってるの？」

「俺のじゃないけどね」

「……いいの？」

「いいよ」

山岸はやつたあ、と声に出して、それから変なふうに顔をしかめた。

「でもさ、普通の高校生の女の子は落語聞かないよね？」

「……なんで判つてないんだろうな。」

「バカだな、山岸。自分のコト普通だと思つてんの？」

山岸が普通の、そちらへんの女子と同じだったら、まるで意味はないつてことに何で気づかないんだろう……。

同志だねつ！

なんて、いきなり言ひだすよつなヤツだから、その山岸なの。

「あつ！ なんてことをつー。」

ムキになつて反論しようとする山岸を俺はじつと見る。

「そりゃ、あたしはヘンかもしないけど、それを前島とは言わ

れたくないなつ！

「もつとへんな気がするつて？」

「そうだよ」

「いいじやない。充分へんなんだからさ」

「いや、だからねつ」

そーじやなくてつと叫んだ山岸に、

「好きだよ」

なんて、俺は言つていた。

「たしかに…………え？」

聞こえなかつたのかな？

「俺さ、山岸のコト好きだよ」

繰り返してみる。

山岸のきょとんとした顔は変わらない。

「一か月なんて言つたけど、本当は、答えは出てたんだ。好きなんだ。俺とつきあつて欲しい」

よつやく、山岸は正氣の顔に戻る。

「ちよつ……ちよつと待つて。待つてね。それ、油断してたボディーに入つたわ」

真つ赤になつていく山岸を俺はやけに冷静に見ている。何故だろう。どんな顔して言えばいいんだろうって考えてたのに、やけにすんなりと言つてしまつた自分が不思議だつた。

「あーつもうつなんで前島つてこうなんだろう……人が一か月前にやつとの思いで言つたセリフをそんな涼しい顔で……」

相当パニックしているらしい山岸に俺は追い打ちをかけることにした。

「あの方、多分俺の方が先に好きになつたと思つよ
賭けてもいい。「同志だね」つて言われた瞬間から。その直後に仲良くなつたりしなければ、もつとつこの昔に恋人同士つてヤツになつていたかもしぬない。
「え？」

「信じてないだろ。でもホント。なんたって、『同志』になつた時
からだもん」

そして、ペンギンが飛ぶと教えてくれた日、飛んだのを見た日。
山岸は俺のことを見つめたまま。多分今は混乱しまくっている。
ひと月前の俺がそつだつたように。だから待つてみる。あの時山岸
が待つてくれたように。知つてゐると知らないのでは全然違うんだ
けど。

でもさつといじからがスタートだと想つから…………。

- END -

(後書き)

随分と昔に書いた作品です。
これを読んだ友人が「今西ちゃん、恋でもしてるの?」と言つたことを、妙に覚えています。
そういうワケではなかつたんですが…。

追記

内容から考えると、「メモリー・オブ・ペンギン」の方が正しいとは思うのですが、今回のタイトルは、あえて「ペンギンズ・メモリー」としています。……って、これは蛇足ですね…（苦笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6344d/>

ペンギンズ・メモリー

2010年10月8日15時18分発行